

只見の自然に学ぶ会 通信



ユキツバキの花

Vol. 6

本物の森

新国 勇

森林浴、森の案内人と、近ごろ、なにかと森ブームです。しかし、どれだけの人が本物の森の姿を知っているかといえば、はなはだ心もとない状況です。ある人は、スギ林やカラマツ林を見て森といいます。クヌギやコナラの雑木林や鎮守の森も森といいます。どれもまちがいではありません。一般に緑色の木々がまとまって生えている場所を、森と呼んでいるようです。これらはヒトがかかわってできた森です。スギ林やカラマツ林は、ヒトが植えて育てた人工の森なので、人工林と呼び、建築材として利用されます。クヌギやコナラは、長い歳月をかけてヒトが定期的に伐採しながら管理してきた森です。雑木林とも呼ばれ、ドングリのなる木です。これらは

天然生林といい、むかしから材木は薪や炭の燃料用として、枝や葉は肥料とされてきました。これを二次林ということもあります。天然生林と二次林は同じ森林ですが、天然生林はヒトとのかかわりを、二次林は樹木の発達段階を基準にしている用語です。

多くの人々が森と呼んでいるのは、このような人工林や天然生林を指しているようです。しかし、森にはもうひとつたいせつな森があります。それは天然林です。天然林こそ、本物の森、つまり、その土地特有の樹木であるブナやトチノキからなる森林です。ただ、天然林を知っている人はわずかです。それは仕方がないことかもしれません。天然林は、深い山か標高の高い山にあって、見る機会が少ないのです。只見町を中心とする奥会津地域は、天然の森であるブナを自分の家から見ることができます。森が広いとか、緑が深いとかではなく、「ほんとうの森」「本物の森」があるのが只見町です。このことをもっと多くの方々に知ってもらいたいと思います。

◆トピックス

県立博物館「第2回うつくしま自然展－貴重なふくしまの自然を守る－」に学ぶ会も出展

この展示会は、ふくしまの動植物・鉱物研究団体の活動を紹介、標本・資料等を展示してふくしまの多様で貴重な生き物やその生息環境について知識を深める機会とするために開催されるものです。

主催／うつくしま自然展実行委員会・福島県立博物館

会期／平成21年7月7日(火)～9月4日(金)

会場／福島県立博物館収蔵資料展示室(常設展料金)

只見の自然に学ぶ会は3m程のスペースに会の趣旨と活動状況、ユビソヤナギ・クロホオヒゲコウモリ・カワヤツメ・ブナ林等のパネルと解説を展示する予定です。

「勇学」再開!

定例会の勉強会を再開する予定です。テーマは自然系その他に、新たに只見の歴史・文化財も加えて、実地の文化財めぐりも企画したいと思っています。取り上げて欲しいテーマなどご要望を事務局へお寄せください。

BOOKS (MLより)

*「足跡図鑑なんてありませんよね?」ありますよ。

今泉忠明ら『アニマルトラック・ハンドブック』が便利。最新刊は『アニマルトラック&バードトラック・ハンドブック』1,050円。どちらも自由国民社から出ています。実物大足跡だけでなく、糞など動物の痕跡について簡潔にまとまっていて、便利です。



(1/29・聖)

*すでにご存知の方も多いかと思いますが、稲葉のおススメのブナの本をご紹介します。

『ブナの森は宝の山』文＝平野伸明・写真＝野沢耕治(福音館書店・2006)

秋田県奥森吉のブナ林を舞台に、美しい写真と簡潔な文で、ブナ林とそこに生きる動植物をオールカラーで紹介しています。稲葉の好きなイワナもサンショウウオもカエルも出てきますが、可憐な草花、ブナの写真に惚れ惚れします。「かっちょい〜」の一言。(4/3・稲葉)



奥会津の水辺林保護

鈴木和次郎

「奥会津の水辺林保護」と題して、読売新聞福島版「提言」に連載されたものを転載します。

奥会津の水辺林保護① 特異な環境育む溪畔林

奥会津地域には、原始的なブナ林を始めとする世界遺産級の自然環境が広範囲に残されている。その中核をなすのが、面積8万3500[㊦]という国内最大の保護林として指定された「奥会津森林生態系保護地域」だ。金山町、只見町、檜枝岐村、南会津町の一部を含む只見川流域沿いの越後山脈南部一帯にあたる。さらに、一昨年発足した尾瀬国立公園や越後三山只見国定公園も含まれている。

この地域の自然環境を特徴づけるのは、日本有数の多雪地帯とその影響を受けた植生である。雪崩と雪圧によって、地表をえぐり取られた急傾斜と「やせ尾根」を持ち、その上に成立する森林が広大な面積で広がっている。このそそり立つような地形を「雪食地形」と呼ぶが、これが氷河ではなく、多雪という環境のもとで形作られ、さらに比較的低い標高に成立していることも注目に値する。その荒々しい地形と厳しい環境の下に特異な森林植生が形成され、それが広大な面積で存在することは驚異的である。

ブナ林は冷温帯を代表する自然林で、一般には土壌の深いなだらかな斜面に成立する。いわゆる「ブナ平」と呼ばれる地形である。しかし、奥会津の場合、ブナが優占して生育する立地が極めて少なく、尾根や斜面の下部、そして中間斜面の雪の影響が少ない場所にかろうじて生育している。その結果、やせ尾根の稜線部にはキタブヨウやネズコが列状に連なり、ブナは矮性化^{わいせい}する一方、谷底ではトチノキやサワグルミなど水辺に生育する樹木と混在して分布し、そのサイズもずば抜けて大きなものとなる。

この地域の景観を特徴づけるのは、雪崩によって山腹が削り取られて土壌の乏しい岩盤に張り付く草本植生、そしてミヤマナラやマルバマンサクなどの低木類からなる崩壊地植生である。さながら森林限界、あるいは、その上の高山帯の森林植生を思わせる景観を呈している。

鈴木和次郎

独立行政法人森林総合研究所主任研究員。専門は造林学、森林生態学。人工林地帯での「週水域管理」を目指す技術開発に従事し、希少樹種の生態と保全技術の開発、自然林再生プロジェクトにも参加。

そうした中であって、鋭く切れ込む谷が折り重なり、複雑な地形構造が形成されている。さらに、その谷底にも毛細血管のように大小さまざまな河川や溪流が流れる。この山地帯のV字谷の狭い谷底の「河川氾濫原^{はんらん}」に成立する森林群集を「溪畔林」と呼んでいる。主要な構成樹種は、トチノキ、カツラ、サワグルミ、オヒョウ、イタヤカエデなどである。地味豊かなこともあり、樹木は巨大に成長し、うっそうたる森林を形成している。

溪畔林は、奥会津地域の自然景観を構成する極めて重要な要素で、自然生態系の維持にとっての根幹を成す。それも広大な手付かずの自然環境を背景に存在することの意味は大きい。溪流釣りであれ沢登りであれ、樹冠に覆われ、直射日光が遮られた昼なお暗い溪流を進むのは幻想的であり、それこそ、残したい、守りたい豊かな自然である。

(次回は15日の予定)

◇

豊かな生態系が残る奥会津地域。その環境形成に大きな影響を及ぼしているのが只見川流域などに広がる水辺林だ。水辺林が果たしている役割と保全の課題について語ってもらった。

(出典：読売新聞福島版・2009.4.1)

奥会津の水辺林保護② 流域生物の多様性保全

河川や溪流沿いに成立する河畔林や溪畔林は総称して水辺林と呼ばれるが、それらは奥会津地方の自然景観の重要な構成要素となっている。

河川域ではシロヤナギやオノエヤナギ、渓流域ではサワグルミやトチノキが主要な構成樹である。そこは、森林生態系と河川生態系の接点であり、相互に関係し、補い合う役割を担っている。河川は台風や大雨で度々、増水・氾濫^{はんらん}し、水辺林を破壊する。その一方で、水辺林は水流や土砂の移動を妨げ、また河岸や溪岸の侵食を防止し、災害を防ぐ役割を担っているといわれる。大雨の際、斜面から河川に流れ込む濁水を水辺林が受け止め浄化する機能、さらに汚濁物質を水辺林の根系部が捕捉し、水質浄化に役立つことも報告されている。

河川の上流部は、水温が低く、イワナやヤマメなどサケ科魚類の生息場所となっている。しかし、水温が低いこともあって、河川の基礎生産を担う藻やプランクトンの発生が抑制されるため、一般に貧栄養状態にあると考えられている。この状況を変えているのが水辺林である。

水辺林からは大量の枝葉が河川に供給される。これらは、水生昆虫によって分解・消費され、さらに大型の水生生物の餌となり、食物連鎖の基礎生産を支えている。夏季には、落下昆虫が河川に供給され、魚類などの餌となる。

また、低温水を好むサケ科魚類にとって、夏季の水温上昇は致命的な結果を引き起こすが、流路に張り出した水辺林の樹冠は、直射日光を遮断し、水温の上昇を抑制するため溪流魚にとって好適な水温環境が維持されている。さらに水辺林は、倒流木を供給する役割を持っている。溪岸の侵食などで流路に倒れこんだ樹木は、流れを塞ぎ、土砂を堆積させて、河川の複雑な地形構造を作り上げ、また、それ自体が魚類の隠れ場所となる。一方、陸域の水辺林は、流域の生物多様性の保全にも大きく寄与している。特異な立地環境から、様々な動植物の生育・生息場所として利用され、依存的な種類も多い。水域と陸域を行き来するサンショウウオなどは代表的な種である。また、本流と支流をつないで連続的に存在する水辺林は、動植物の移動・分散の生態学的な回廊としての役割も大きいとされる。動植物は、水辺の回廊を通じて、移動・分散を繰り返してきたと言ってもよい。

しかし、今、水辺林の連続性は各種の開発行為によって分断され、孤立、縮小し、変質の憂き目にあっている。

トチノキは、奥会津地域の溪畔林の主要な構成樹種で、用材や養蜂の蜜源として極めて重要である。また、そこから精製されたトチ粉は、栃餅をはじめ

様々な食品に利用されている。こうしてもたらされる恵みは人間に限ったことではない。トチノキの蜜や種子は、昆虫類や小動物の飼料として利用され、それを通じて、樹木、昆虫、哺乳類などが密接にかわりあって森林生態系が維持されていることに目を向ける必要がある。

(次回は 22 日の予定)

(出典：読売新聞福島版・2009.4.15)

奥会津の水辺林保護① 生育地全体の保全重要

只見町を流れる伊南川で 2003 年 8 月、河畔林の調査中、少し外見の変わったヤナギに出会った。本県におけるユビソヤナギの発見だ。ユビソヤナギは 1972 年、群馬県の谷川岳直下の湯檜曾川で見つかった高木性のヤナギの一種で、絶滅危惧種とされている。

その後、伊南川流域を調査したところ、45 ㌦にわたって連続的に分布することが分かり、只見川と幾つかの支流でも分布が確認され、日本最大の自生地であることが明らかになった。しかも、他の自生地が人里離れた河川上流に見られるのとは異なり、人里近くの平坦部に分布していることも特徴の一つ。特に伊南川には、河川の氾濫原^{はんらん}のほか、「中島」と呼ばれる中州にもユビソヤナギを含む河畔林が発達している。なぜ、大規模な自生地が伊南川流域に残されたかは、未解明な部分が多い。北関東から東北地方にかけての平野部に広く分布していたが、その後の温暖化で、河川上流部に追いやられ、奥会津地域に残されたと考えるのが妥当のようだ。

かつて、川辺にヤナギは、日本の代表的な風景だった。しかし、高度経済成長期に自然災害から流域住民の生命財産を守るため、自然堤防は人工護岸となり、河畔林の多くが消失した。伊南川に関する限り、ヤナギ林はかろうじて残されてきた。しかし、今、洪水被害を拡大するということから伐採の対象になっている。

ここで問題となるのは、ヤナギ林の保全と住民感情との調整である。今日の河川管理のあり方が問題を複雑にしている。住民の生活と絶滅危惧種の保護・保全は両立するのかと問われた場合、私は、「可能であるが、大変難しい」と答えている。希少種の多くが絶滅の危機にあるのは、多くの場合、人間活動

が絶滅に追いやっているという事実が歴然としてあるからである。住民生活と保全を両立させるとすれば、人間側に多少の不便は我慢し、不利益を受け入れようとする姿勢がなければ、希少種の保護は基本的に難しいといわざるを得ない。

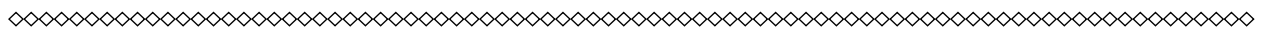
解決法として、①移植②一画を厳正に保護して他を開発③希少種には手をつけないが、一般の種は手をつける——といった意見がある。しかし、これには多くの問題がある。

ユビソヤナギで言えば、河川かく乱による破壊と修復の上に、集団が維持されている。立地が安定すれば、比較的寿命の短いユビソヤナギは枯死し、その後の更新が難しくなってくる。集団の分断と孤

立、小集団化は遺伝的な多様性を損ない、絶滅リスクを高めてしまう。さらに、ユビソヤナギは純林を形成することはほとんどなく、幾つかの樹種と混交するのが自然の姿であるということを忘れてはならない。

つまり、生育地全体の保全が重要である。ユビソヤナギが自生しているということは、豊かな水辺環境が残っている証しである。この環境を守ることが地域の自然環境を維持し、豊かな地域社会を形成する基盤となることを流域住民が是非とも理解し、自然環境を保全していることを地域の誇りとしてもらいたいと思う。

(出典：読売新聞福島版・2009.4.22)



◆学ぶ会メーリングリストより

*芋虫の観察から思うこと

イモムシの観察をしています。よ〜く観察することの大切さを改めて感じています。そして地域の自然を維持するためには、景色に映る様々な様子、様々な生き物をしっかり観察して対応していかなきゃなあとお感じします。

12月に畑で採れたレタスを食べようとしたら、中から芋虫が出てきました。蛾の幼虫だということは分かりましたが、その生命力に殺すに忍びなくなり、小さなタッパに入れて飼っていました。レタスをモリモリ食べ、なんと1月半ばには脱皮しました。脱皮の様子もとても興味深いものでした。一段と太くまん丸くなったイモムシに、このままでは、外の世界が春になる前に成虫になってしまう…と真剣に対処を考え始めました。

『これは一体何て言う蛾なのだろう?』インターネットで調べましたが種類は多く、似たのは見つけても特定はできませんでした。そこで詳しい方に尋ね、結局ヨトウガと分かりました。どこにでもいる蛾ですから、名前が分かるとその生態も調べられます。卵から集団生活する幼虫になり、その後は単独生活でレタスなどの中へ。そして土に潜ってサナギになり、そこから出てきて成虫に。成虫では1週間から10日の命だそうです。

それまでタッパの中で剥いたレタスやキャベツの葉を入れていました。昼間はその葉の裏側でジッとじていて、夜になると動いて食事をします。人間のいる部屋に置いた時は糞は固くしっかりしていましたが、成長を遅らせようと寒い部屋に置いたら、芋虫でもお腹をこわすのでしょうか、糞が柔らかくなりました。ヨトウガとわかり、しかも今はもう終令だとも教わりました。次はサナ

ギです。そして、サナギになるときは、もう羽化の時期が設定されているとも知りました。神秘的ですね。たぶん2月中旬に羽化するだろうとのことでした。

こうしたことが分かってきて、羽化の準備に入れ物も大きくなり、土を入れて枝を立てかけました。レタスも一枚の葉ではなく、巻いたままのレタスを入れました。したらその晩にはレタスの中に入り込み姿が見えなくなりました。待ってました!って感じです。

大自然の中で生きている生き物もそれぞれに生き方があるんですね。人間には「害虫」と嫌われている蛾にも生き方があるって気付かされました。

(1/22・潤)

*稲葉氏、捕まる?

先日の夜は少しあせりました。新国さんとの電話やり取り中に、闇夜に浮かぶ赤いサイレン。あわわ…。実は、通報されたり職務質問されるのは5回目。一番ひどかったのは、福島県南東部の河川で調査中、河原のカヤ原がいきなり火事になった時。水戸ナンバーの車だし、悪い事に手には麻酔薬のビンと注射器を持っていた…。「何やってんだ!!」「何で注射器とか薬品持ってたんだ!!」地元消防団や警察に少々絞られた。腕章やネーム、ちゃんと着けているんですが、やっぱり怪しいのでしょね…。

(1/25・稲葉)

*山と川のつながり

町中を車で走る時によく感じることを書いてみたいと思います。当たり前ですが山と川はつながっています。そこは命のつながりだとも思います。動物たちが山から川へ降りるとき、私たちが通る道路を彼らも横切ります。けもの道が自動車の通る道路にもあるわけです。

雪の季節の朝、道路を運転しながら、私は両側の雪の面に動物の足跡がないかキョロキョロします。そうす

ると、道路のけもの道がどこら辺にあるのか分かってきます。そうして感じた場所は、私にとって大切な宝物です。そこを通るたびにウキウキします。私はカエル好きとして知られていますが、カエルも同様に道路に通り道があります。それが分かるから、その場に車を走らせる時には慎重になります。

動物はどんな場所を通るのか、どんな場所は通らない(通れない)のか、山と川の命のつながりを断たないためにはどうしたらいいのか、そんなことを考えます。

ナイト・エコツアーなんてのがあったら面白いかもしれませんね。山の動物たちが人間の道路をどのようにして渡っているのか、彼らに気付かれないように、遠くからそうっと眺めてみたいと思います。『けもの道あり。走行注意!』みたいな道路標識を掲げたら、自動車を運転する人もスピードを落としてくれるかもしれません。そして小さな動物も渡れるように配慮した環境整備がされるようになるかもしれません。そうなったらいいなあ、と思います。(2/2・潤)

*会津高校の五ノ井です。今日、新聞で鈴木和次郎さんの記事を読ませていただきました。ハナノキの保存のご報告があり、ありがたい思いに浸りました。ハナノキ友の会に入っている私ですが、会の代表の北沢あさ子さんの熱意には心の底から感服させられます。なかなか行政の理解が得られず、地域の人から嫌がらせめいた仕打ちもあったと聞いております。しかしそんなことには全くめげず思いを込めて活動されていらっしゃる。只見の皆さんとお互いに手を取り合って頑張っていきたいものです。(2/3・五ノ井)

*2/1講演会の報告

2月1日開催、第2回 只見の自然を学ぼう会の参加者は43名。和次郎さんのスライドのタイトルは以下の通り。

[講演内容]

【1】ハナノキの生態学的特性と保全

1. ハナノキとは何か? (アカイタヤではありません!)
2. ハナノキの植物学
3. 絶滅危惧の現状と背景
4. 保全のための生態学
5. ハナノキ保全のための取り組み

【2】ユビソヤナギの現状と保全上の課題

1. ユビソヤナギの分布
 - (1)地理的分布と遺伝的分化
 - (2)地域的分布:ユビソヤナギ自生地の現状

【3】保全のための前提

1. 保全対象樹種の生態(生活史)を知る!
2. 保全対象樹種の個体群動態を知る!

3. 生態系として守る!

なお、講演会前日、和次郎さんとマニアな5人で伊南の白沢と耻風のヤナギ伐採予定現場を見に行き、夜は和次郎さんにユビソヤナギ調査報告書作成指導を受けました。(2/13・聖)

*あがりこ

【質問】アガリコミズナラってミズナラとどんな違いがあるのですか?

【答え】「アガリコミズナラ」という種類の木があるのではなく、「あがりこ」とは木の状態。幹が高さ2m前後からたくさん枝分かれした奇形木のことで、東北の方言だそうです。

作業のしやすい残雪期、人間が雪の上に出た幹を薪炭材として伐り出す。木は伐られた刺激で成長ホルモンを出し、眠っている芽を起こしたり新たに芽をつくったりして、太い枝や幹の途中から枝をたくさん出す。これを繰り返すと、あがりこに。だから、雪深い、人里に近い所にしか存在しません。「上がった所から新しく子が生まれる」から、「あがりこ」だそうです。

秋田や山形のブナのあがりこは巨樹巨木好きには有名で、観光資源になっていますが、辞書などに載るほど一般的な言葉ではないので、本で調べようとすると難しいです。でも、「あがりこ」「アガリコ」でネット検索すると、たくさん情報がありますよ。(2/13・聖)

*新年会報告

講演会終了後、民宿ふるさとで懇親会兼ねた新年会をしました(参加12名)。野菜や田舎料理のもてなしで、和次郎さん満足そう。栗おこわのてんこもりごはんを、おいしそうに食べる稲葉さんにみとれましたが、北海道直送のエゾシカ肉料理に顔こわぼる彼でした。とにかく、稲葉さんは、見ていて飽きないお方です。今回はめずらしく、カラオケまで飛び出し、佐野さんがサクスの生演奏で拍手喝采、次回やなぎの曲(ジャズらしい)をリクエストされました。楽しみ。

それぞれが抱えている問題点や疑問を各自、和次郎さんにアドバイスをうけておられたようです(さすが顧問の存在感あり)。これからも、よろしく願いいたします。(2/13・和)

*クマタカです

午前11時50分ころ、入叶津側の要害山上空を帆翔するクマタカ1羽を確認。輪をかいて只見スキー場の方へ移動。そういえば今日は町民スキー大会。見た人いた?(2/22・勇)

*昨夜は浜通りは雨。気温2~3℃の夜間、19~21時30分まで「いわき市」から「南相馬市」までカエルを探して歩く。すると、やはり雨に誘引されたのか、ヤマ

アカガエルが動いている。ほとんどオスでしたが、中には、お腹から卵の出たメスの斃死体もありました。クロサンショウウオも今年は暖冬のせいか1月から産卵。只見での産卵、3月か4月に見に行きたいです。(2/25・稲葉)

*先週土曜、県博の勇さん講演会を覗いて来ました。

月田禮次郎さんと古川さんも参加。私は最初だけ様子を見て、冬の展示「化石・鉱物展」を見に行っていました。講演会にほぼ参加した孝之曰く、「分かりやすい話で、盛況だった」と。

勇さんの話は何度も聞いたことがあるから、若松でわざわざ聞かなくてもいいかな、と思い、化石にのめりこんで来てしまいましたが、よく考えたら、学ぶ会として勇さんの話をちゃんと聞いたことがないのでは？ 次回の只見の自然を学ぼう会は、勇さんによる「只見の自然の基礎知識」講演会はいかがでしょう？

ちなみに、県博「化石・鉱物展」には黒沢鉱山や布沢など只見の石も数多く出品され、面白いですよ。4月5日まで。3月29日には展示解説も。常設展「自然」コーナーには和子さんが野々沢で発見した素晴らしい魚の化石もあります。(2/26・聖)

*続・ブナの山旅

我孫子市にて冬眠中の坪田です。「続・ブナの山旅」を出版しました。部数限定の自費出版です。発売後1週間で出版社の在庫が底をついてきたそうです。一般書店では入手が難しいと思われる。ご希望の方は手持ちの在庫分をサインを記してお分けていただけますので連絡下さい。



ちなみに会津では高陽山、博士山、高森山、大博多山と尾白山、平石山から大三本沢、叶津川と木の根沢、真名川・十国沢歩道、六十里越旧道、尾瀬・ブナ平と渋沢尾根、道行沢、会津駒ヶ岳と只見のブナ巨木を取っています。(3/11・坪田)

*月田農園雪遊び

3月15日(日)禮次郎ワールド雪遊び、昨夜の新雪と思わぬ天気恵まれ3月にしては、純白の雪景色。大人8人・学生2人・犬2匹、野山を駆けめぐって来ました。

禮次郎さんは、ホウノキの新芽で作る笛や、キブシの芯を抜く遊びなど思いがけないもので、遊び心いっぱい。何度行っても飽きないお方です。昼食は持参したものの、マトンとシカ肉の焼肉をごちそうになり満腹

じゃー。腹ごなしに裏山へクロカンとスノーシューで散策。遊び過ぎて帰りが遅くなってしまいました。

帰りがけ玄関にあやしげな物音。なんとテンが潜んでたらしい。そこは、元獵師の血が騒ぐ、素早く網を使って一度は捕獲したが、するりと網から抜け出し、スタコラサと裏山に逃げて行きました。禮次郎さん曰く、「あんまい毛皮になんねーな、色が悪かったぞ」。でも皆、「めげーがった」と満足、満足。(3/16・和)

*ツバメとカシラダカ

今朝、ツバメのさえずりで目覚めました。その後、ピーチュク、ピーチュクというにぎやかなさえずりが裏の木から聞こえます。冬鳥のカシラダカです。これから夏鳥と冬鳥の交代時期。ふだんは聞くことができないさえずりも聞くことができるおもしろい季節がやってきました。(3/22・勇)

*白鳥情報

4月5日午後2時、滝湖に白鳥16羽が羽休めします。越冬していた組は、2月に飛び去っているの、この白鳥たちは南から飛んできて、滝湖で一休みしていたものでしょう。これは、滝湖が白鳥の中継地として、認識されてきたのかも。毎年、羽休めに降りてきてくれればいいなあ、と思った次第。(4/5・勇)

*救急講習会報告

4月12日の消防署による救急講習会は14名参加。救命処置(AED使用)の指導を受けました。繰り返し受講し体験しないと、やっぱ忘れてることが多いことを実感しました。次回計画したときは、ぜひ多くの方が参加されることをお勧めします。(4/13・和)

*春の花観察会報告

4月12日の観察会は快晴に恵まれ、雪解け水の流れる黒谷川のユビソヤナギを観察しながら、田んぼのあぜ道や土手に咲いているイチリンソウ・カタクリ・スミレ・フクジュソウなどの草花を楽しみました。残雪のところでは雪に押しつぶされながらも、背丈が伸びるまで待ち切れず花芽をつけてる小人のカタクリなどが混じり合っていました。(4/13・和)

*残雪期の塩沢の大ブナの状況

昨日、今年初めて只見に入り、昨年見つけたブナ巨木に挨拶してきました。残雪期に巨木付近一帯の状況確認が目的でした。巨木の廻りをグルリと廻って眺めると、根元付近だけではなく上部の幹にもウロができていて、この巨木は見た目以上に痛んでいるようです。巨木の右奥にトチノキと思われる巨木が急斜面にへばりつくように立っていました。さらに上部にはブナ巨木らしい大木が呼びかけているようなので、急斜面をよじ登って近付いて見ました。

30m位から先は残雪は雪崩落ちていて近づけません。強引によじ登ることも考えましたが、滑落の危険もあり幹周りの計測は断念しました。まわりのブナの幹と比較してもかなりの大木であることが解ります。根元部が曲がった5m級の巨木のように見えました。残雪期は森の状態がよく見えます。一部杉の植林帯は幻滅ですが、この一帯のブナ林の原始性の素晴らしさが確認できました。ここも只見のブナ林の宝のひとつに挙げられるでしょう。(4/20・坪田)

*クロツグミの美声

今朝7時ころ、キョロロン、キョロロンとクロツグミが近くの木でさえざりました。朝からうれしい美声が聞けていい気分。(4/20・勇)

*ミヤマホオジロ発見!

今月7日、長浜の古川さんが、庭の木にミヤマホオジロが1羽いるのを発見。さっそく写真を1枚撮影。身動きもしないで、しばらくじっとしたままだったそうです。ミヤマホオジロは西日本では、群れで見ら



れる冬鳥ですが、東北地方では珍鳥です。只見でも初記録。貴重な記録写真となりました。(4/20・勇)

*うつくしま自然展の参加(1ページ参照)

県立博物館が今年、企画している「うつくしま自然展」で、学ぶ会に参加の要請が届きました。これは、自然史博物館発足の機運を盛り上げようというねらいで開催されるものです。今年、博物館の館長トーク講座に参加しており、打診されたものですが、正式に要請がきたものです。

博物館から出る予算は、わずかですので、各団体で自主的に作成してほしいとのこと。したがって、展示は、すべて各団体におまかせするという事です。3mくらいのコーナーを提供したいそうです。(4/23・勇)

*トキ出現!

今日お昼過ぎ、只見町内の水田でトキ出現!まさかではなくほんとうです。

3歳のメス。昨年9月佐渡島で放鳥、新潟県をまわって山形県遊佐町経由で只見に着たらしいものです。場所はお知らせできません。明日からとんでもないカメラマンが集まってくるのは確実です。どうか静かに見守ってください。(4/30・勇)

Report 黒沢アガリコミズナラの森

アガリコ(上がり子)といえば、鳥海山北麓の中島台のアガリコの森が有名だが(会員の坪田さんの『ブナの山旅』にも紹介されている)、わが只見・黒沢の裏山にもアガリコの森がある。中島台はブナだが、黒沢はミズナラ。

アガリコとは、薪炭材として春先に伐られた木がその部分から芽を出し、それが成長するとまた伐られを繰り返すうち、こぶ状になったり奇妙な形に成長した木のこと。

この黒沢のミズナラは、黒沢鉱山が薪炭として使っていたものなのか、鉱山跡の背後の森のある一定の大きさ以上のミズナラはすべてアガリコだ。数えたことはないが、100本以上はあるだろう(そのうち数えてみます)。

2月5日の冷え込んだ朝、かた雪をかって犬と一緒に訪れてみた。

家から歩いて30分ほどでアガリコミズナラの森に到着。今日はかた雪だったので夏の巡視路ぞいに登った。標高差にして70mくらいの急な登りがある。積雪期であれば、スキーを使って黒沢鉱山跡から登るのが楽だ(地図の左回りの破線)。

平坦になると送電線の鉄塔に出る(地図上の



448)。ここから送電線の下を少し歩くとアガリコが出てくる。直径1m前後のミズナラもそこそこあり、なかなかいい雰囲気森だ。地図にアミかけた部分がアガリコミズナラが見られる範囲(巡視道も範囲も自分で書き込んだもので、かなり適当です)。地図右上の沢沿いのミズナラの巨樹は、このあたりでは一番立派な木だが、この木はまっとうな姿をしているから、ここまでは利用していなかったということになるか。

ひと周りにして、鉱山跡へ下る。川霧のかかった只見川が眼下に大きい。下ったあたりの只見川のヤナギ林がまたいいのだ。(2/5 AM6:30-8:00・kuma)

◆ 活動予定

* 5月定例会

- 日時／5月9日(土)11:00～
- 場所／只見温泉保養センター和室

※当日午後開催の「学ぼう会(講演会)」の準備も兼ねて、昼食を食べながら行ないます。出席予定の方は事務局まで連絡を。

* 第3回只見の自然を学ぼう会(講演会)

「只見の植物と巨木ー奥深い自然に育まれた草木たち」(詳細はチラシ参照)

- 日時／5月9日(土)13:30～15:30
- 会場／只見地区センター視聴覚室
- 講師／刈屋 寿先生(弥彦山脈植物友の会会長)

※参加費無料

※講演会終了後、18:00～民宿ふるさとで刈屋先生を囲んで懇親会を行ないます(会費3,000円・飲み物は各自・懇親会参加希望者は事務局まで連絡を)。

* バードウォッチング(只見地区センターと共催)

- 日時／5月10日(日)8:00～10:30
- 場所／寄岩・大畑沢林道
- 集合・出発／只見地区センター前・8:00出発
- 持ち物・服装／長靴・防寒着・双眼鏡・飲み物

※小雨決行

* 草花観察会&巨木めぐり

- 日時／5月10日(日)11:00～
- 場所／蒲生周辺(予定)

※バードウォッチング解散後、刈屋先生と草花観察会・巨木めぐりを予定。参加者はお弁当・飲み物持参。

* 総会

- 日時／6月6日(土)18:00～
- 場所／青少年旅行村・バーベキューハウス

※会員には返信はがきでご案内をします。

※総会終了後、懇親会を行ないます。ご家族、ご友人もお誘いください(参加費2,000円・飲み物は各自)。

* 吉生峠に行こう

- 日時／6月7日(日)(予定)

※地元ガイドに案内していただきます。詳細は後日MLでお知らせします。

■ 編集室から

またしても、学ぼう会講演会開催に間に合わせるべくの特集編集。アガリコミズナラ始め、写真が載せられず、文字だらけの通信になってしまいました。不備の数々お許しください。

連休は、春や人やいろんなことが一気にやってきて、いつものごとく流されまくり。

* ブナ林散策

- 日時／6月21日(日)(予定)
 - 場所／蒲生川・真奈川林道
- ※詳細は後日MLでお知らせします。

◆ 活動報告

(※は「学ぼう会メーリングリストより」に詳しい内容報告)

* 第2回只見の自然を学ぼう会(講演会)「希少樹種の保全とは何か?～ハナノキからユビソヤナギへ～」(2/1(日)14:00～15:30/朝日地区センター2階大ホール/講師・鈴木和次郎氏/43名参加)※

* 旧暦新年会(2/1(日)18:00～/民宿ふるさと/12名参加)※

* 雪まつりで遊ぼう/学ぼう会「雪まつり」行事(2/14(土)/雪遊び(参加11名)&懇親会(参加13名))雪まつりの初日、事務局の自宅の裏山へスノーハイクへ。あいにくの雨もよりの天気でしたが、元気いっぱい、スキーやスノーシューの11人と犬が4頭、館ノ川の館跡まで往復しました。只見温泉保養センターへ場所を移し、温泉・鍋で体を温め、雪まつり会場へ繰り出しました。遠路来てくれたサポート会員のkurikin一党5人。また来年も待ってます。

* 月田農園「禮次郎ワールド」で雪遊び(3/15(日)参加10名+犬2頭)※

* 3月定例会(3/15(日)月田農園で/10名出席)4～5月の行事について話し合う。

* 救急講習会(4/12(日)9:00～12:00/明和地区センター/14名参加)※

* 4月定例会(4/12(日)12:15～13:15/救急講習会終了後、「吉亭」でお昼を食べながら/8名出席)5～6月の行事予定、総会日程、ホテルマップ作成等について話し合う。

* ユビソヤナギ&春の草花観察会(4/12(日)13:30～15:30/黒谷川林道・倉谷奥まで/参加13名)※

